

何かひとつのものとして役者からのメッセージをキャッチする事（感じる）と、作者からのメッセージをキャッチする事（知る）は、本来、異質の営み。（感じる）重視の傾向にある私ではあるのですが、（知る）を求める人には、それならばそれで徹底的に知って欲しくもあります。惚れた男に就いて親友に喋る時、年齢・職業・国籍レベルの表面的で中途半端な話では済ませないでしょ、あの心理だと思ってください。

能に関連する多くの仕事に従事しながら、「能を普及させたい」という希求を抱いたことは、未だ嘗て一度も有りません。叶うことなら、能は私だけのものにしておきたいくらい。それなのに、一本にまとめて取って公にしようとしているのには、以上の如き経過と動機が有ります。でも……（観能）未体験のかたは、どうか、この本を読まないでください。読まずに、先ずは、（初めて）を大切にしてください。

この本を出産したら、私は、また別の方角へ進んでゆくかもしれません。いつそのこと能から言語を取り除いてみたらどうなるか、言語を取り除いて猶かつ能であり得るような、そのような演劇は可能か、こんなシヨモナイ事を夢想し続けています。或いは、ひよっとしたら、十年後は、舞う事・謡う事がただただ愉しいという状態に却来しているかもしれません。いずれにしても、能とはちゃんと添い遂げたい、と思っています。

〔付記〕

- ・ 八世観世鏡之敷は、昨年七月三日、六十九歳の若さで病没しました。
- ・ 専門用語・研究用語はなるべく使わぬよう努めました。が、解り難い語が在れば御指摘ください。
- ・ 所収予定の十二曲は、葵上・野宮・半蔀・鉄輪・黒塚・道成寺・砦・通小町・隅田川・三井寺・邯鄲・忠度です。

間もなく光源氏との愛が始まった女。そして捨てられた女。シテはその亡霊ですが、登場第一句で次のように嘆きます。「花に馴れ来し野宮の、花に馴れ来し野宮の、あきより後はいかならむ」と。「今は花が咲き乱れているのを見馴れている野宮だけど、この季節（秋）が過ぎてしまった後は、どんなに淋しい風景に成るかしら」が、表の意味。しかし、この一節には、和歌の修辭法のひとつである掛詞が用いられています。「あき」が、それです。「あき」には、「秋」と「飽き」が掛けてあるのです。捨てられた状態を表現する際の、和歌に於ける常套手段なのですが、この掛詞に、観客の何%が気づくでしょうか。気づかなければ、男に捨てられた後の寂寥感を表現している事が解りません。解れば、舞台にただ立っているだけのシテの姿に心打たれるものが有るでしょう。しんみりと、この曲の中に入ってゆけるでしょう。

右の例の類は、まだ末梢的な問題です。言語で以て表現されているものを、〈視〉であれ〈聴〉であれ〈心〉であれ、右の如くに部分的には知らなくても、見終った時に、舞台に現出された何かひとつのものとしてキヤッチ出来ている方が、「ああ佳い時間だった」と想えるだろうから。しかし、一曲のテーマに関わる部分の場合は、言語理解度は、作者からのメッセージを丸ごとキヤッチ出来るか否かにも完全に関わってきますから、作者の為に、問題は末梢的ではなく成ってきます。

『忠度』という曲が在ります。世阿弥作である事が明らかな曲です。シテは、平家の公達（きんたち）の一人忠度（のちの）の亡霊。『平家物語』巻九「忠度最期」が典拠。キー・フレーズは「行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし」で、これは忠度の辞世の和歌。「道の途中で日が暮れて、桜樹の下を宿にすれば、花がその夜の主であろう」ですが、作歌状況（平家敗走の最中）からも、「行き暮れて」は、「人生の途中で行き暮れて」です。つまり、戦場に於いて、いつどこでも静かに死のう、という覚

悟・諦念を託した一首なのです。

世阿弥は、この桜花と忠度（著名な歌人でもあった）を一体化させ、花の主としての忠度像を描こうとしたようです。

次に、テーマなのですが、私は、〈再生〉ではないかと、今は考えています。根拠は、曲の最終末部の一節「花は根に帰るなり」です。

この一節に就いて、どの注釈書も崇徳院の「花は根に鳥は古巣に帰るなり春の止まりを知る人ぞ無き」を挙げています。引用和歌としてはこれで良いかもしれませんが、「根に帰る」とはどういう事なのか、イマイチ解らない。

私は、藤原良経の「雪消ゆる枯野の下（かれのした）の浅緑（こぞ）去年の草葉や根に帰るらむ」を見つけました。これは、「花」ではなく「草葉」ですし、直接の出所ではありませんが、あの一節が解り易く成りました。『若草』という歌題付きなので、これも理解を助けます。

「根に帰る」とは、枯れる事なのではなからうか。還元です。散る・枯れる・死ぬは、還元に必要な条件。枯れてこそ、次の年に再び若しく生れ出づる。とすれば、忠度辞世の一首をキー・フレーズに据えている点とも呼応して、〈再生〉が『忠度』のテーマではなからうか。（これは、まだ試論の段階ですが）

能の手法としては、最終末部では、シテの魂は救済されたのか否か、つまり、亡霊が成仏したのか否か、を問題とするのが普通ですから、『忠度』の手法は異なっているわけで、いかにも世阿弥（常に新風を工夫した作家）らしい作品と言えます。

といったあんばいに、ここまで読み込まなければ、作者からのメッセージは私たちのところまでは届いてこない。右は、その一例に過ぎません。

* * *

には、型（演技）の解説も交えた予習を行いました。

「言語をも表現媒体とする能の場合は特に、予め読んでおいたか否かに依つて、キヤッチ度は大いに異なる」と主張して、頑固者の私を教育してくれた、柔軟な思考を培おうとしてくれた留学生に、私は感謝しなければなりません。

* * *

能は演劇ですが、厄介な事に文学でもあります。器楽に依る音・身体のみを表現媒体とするバレエとは、この点が異なっていて、数年来の私の悩みの種であります。

能は「伝統芸能」「古典芸術」として国内では捉えられていますが、世界の中の能は、普通「詩劇」と分類・呼称されています。演劇であり文学である上に詩……私の悩みは尽きません。

能の舞台装置は実にシンプルなもので、基本的には舞台（三周四方の板敷き）しか在りません。作物（大道具）を出す曲も在りますが、それもシンプルな作りなので、観客は、「現実の物」を想像しなければなりません。

例えば、一畳台。一畳分の畳を敷いた、高さ約二十センチの台。これを舞台に据えるだけで、『石橋』ならば中国清涼山の石橋を、『谷行』ならば大和葛城山の谷底を表現する。一畳台の四隅に細い柱を立て、竹組に布を張った屋根を付けるだけで、同じ『邯鄲』曲中でも、前場では宿屋を、後場では栄華を極める皇帝の大宮殿を表現する。万事この調子。想像も、詞章（謡の文句）に拠るしかありません。（面・装束に就いては割愛します）

その詞章は、一部セリフ等で散文を用いしますが、基本的には韻文で綴られています。「詩劇」たる所以です。

言語をも表現媒体とする能。能に於いては、言語がどのような媒介のしかたをするのか、具体例を出してみます。

『融』という曲が在ります。シテは、稀代の風流貴公子として有名な源融（の亡霊）。二場構成の曲で、前場では賤しい潮汲みの爺さんの姿で登場。ワキ（役名のひとつで、シテの語りを引き出す重要な役）との問答の最中に「や、月こそ出でて候へ」と半ば独白の如くに詠嘆します。これで、月が出たのを表現するわけですから、これは散文だけれども、この一句（月の出に感動する男の純粹高雅な遊狂の心）を、ちゃんと聞き取らないと、情景を想像出来ません。しかも、月が出たというのに、この瞬間のシテは、上方（空）を見上げるのではなく、舞台の床（池の水）を見込むのですから、予習していないと「何しとるんやろ？」に成るでしょう。このように、〈視〉も詞章で以て表現します。

『道成寺』という曲が在ります。シテは、怨めしい恋しい男への執心ゆえに蛇体と成り変わる女。男への復讐の為なのか、自己の滅罪の為なのか、白拍子姿の女は道成寺に到る。鐘供養の為の舞奉納を許可されて喜ぶ女が、しかし低く呻くように謡うのは、「花のほかに松ばかり、花のほかに松ばかり、暮れ初めて鐘や響くらむ」です。この一節で以て、桜花と松の緑に彩られた山寺の春の景色ばかりではなく、入相の時を報せる鐘の音が響きわたっているのも表現します。（聴）を表現する為に、現実の鐘の音を鳴らしたりはしません。

韻文部分では漢詩・和歌の引用が夥しく、それが単なる文飾に停まらず内容にまで絡んでくる場合、見るだけで、作者・役者からのメッセージをどこまでキヤッチ出来るのか、甚だ心もとなく成ってきます。

引用ではなく作者の創作部分も、また然りです。

『野宮』という曲が在ります。典拠は『源氏物語』賢木（さかき）の巻、シテは六条御息所（の亡霊）。前皇太子妃で、皇太子と死別して実家に下って

「能を見に連れて行つて」と、よく頼まれます。私の方からは決して誘いません。いろいろとシンドイから。頼まれた場合も、約束を果たすのに一年はかかります。演者・演目・演能の場、この三点を吟味し厳選するからです。（野外で演じる薪能などは絶対に勧めません）

能会へ行く計画が成立すると、次は予習を頼まれます。が、かつての私は予習不要主義者でした。（初めて）は一生に一度しか無いのだから（初めて）を大切にして欲しい、これが理由の第一。（知）に邪魔されず（体）で見て欲しい、舞台に現出された何かひとつのものとして感じて欲しい、これが理由の第二。

理由の第二は、あの『半薔』体験と、その後のふたつの体験に拠っています。ひとつはポーランドの前衛劇作家タデウシュ・カンツール作『死の教室』ですが、こちらに就いては別の機会に譲ります。いまひとつは、ミラノ・ピッコロ座の京都公演『アルレッキーノ』です。

カルロ・ゴルドーニ原作、ジョルジョ・ストレーレル脚色演出、フェルッチョ・ソレーリ主演の喜劇『アルレッキーノ』は、パントマイムではないので、私にとっては、当然の事ながら、言語（イタリア語）が障害に成るはずでした。ところが、ちっとも障害に成らなかつた……私のイタリア語力は障害に成る程のものではなかつた、のです。これは非常に幸な事でありました。

イタリア語力が完璧であれば、勿論、言語の問題は生じません。しかし、中途半端なイタリア語力だと障害に成り得ます。聞き取れる部分があるだけに、聞き取れない部分が生じ、聞き取れないという状態が邪魔をして、私は舞台（演技）に集中出来なく成る。演者からのメッセージをキャッチ出来なく成る。

フェルッチョ・ソレーリ演ずるところのアルレッキーノは、どうも女

好きで食いしん坊で天真爛漫な男らしい。これぐらいは、舞台に集中していると解ってきます。それに、喜劇なのに久しぶりに感動というものを、「生きてるって嬉しいよね」と心の中で叫びながら帰路についたのです。後にソレーリさんのインタビュ記事を読みました。私はソレーリさんからのメッセージを丸ごとキャッチしていたようです。というわけで、予習（主に言語解説）不要主義は今も私の内に棲息してはいるのですが、一方で、予習の効用に目覚めてもいます。

私を目覚めさせた契機に就いて、以下に記します。

契機その一は、京都造形芸術大学の公開講座（瓜生山エクステンション）です。「能を味わう」と題して、毎回一曲づつ丁寧に読み解くのを目的としました。一般のかたを対象にして能を講ずるのは初体験で、全く自信が無く、綱渡りしているような怖さ。それなのに、結果は大吉。

例えばS夫人（五年経った今も他所での私の講座を受講中）は、「せめて十年前にでも先生の話を聞けていたなら、私はもっと豊かに生活出来ましたのに」とまで言うてくたされました。単細胞の私はすっかり舞い上ってしまいました。嬉しくて嬉しくて……あの嬉しさが、その後の私の行動の原点です。

その後は、地元奈良ばかりか博多・太宰府・広島に於いても長期契約の講演屋稼業。同じ方法（読む）に依って、能を講じ続けました。その過程で、言葉の綿密な読みは見る為にも有効であるらしい、と知ったのです。

契機その二は、留学生とのつきあいです。私が大阪外国語大学・京都大学で教えた留学生は、現代日本語は勿論の事、私の担当は『徒然草』講読・古典文法・漢文でしたから、古典日本語も出来る子たち。そういう好条件が先ず有りました。加えて、滞在時間は無限ではないという切迫感も有ります。（初めて）は一生に一度しか無いのだから（初めて）を大切にして欲しい、などと悠長に構えてはいられません。希望する子

『読む能 十二選』 執筆ノート

王 藤 内 雅 子

『読む能 十二選』を執筆中であります。

能は、普通「見る」と言います。「観能」という熟語は在るけれど、「読む能」という熟語は在りません。私が敢えて『読む能』というタイトルを掲げて一本にまとめようとした、その動機に就いて記したいと思います。

* * *

話は、能とのつきあいが始まった四十五年前に遡ります。

私は、六歳から能の稽古を始めました。洋楽（ピアノ）のレッスンは苦痛でしかなかったのに、能の日は水を得た金魚。子供なので稽古は舞だけですが、舞は謡にのせて舞うものだし、大人たちの謡も耳に入ってきます。意味は解らないけれど、心地よいリズム。お風呂の中で「ゲエツ キイウデンノオ、ハアクウエエノターモートー」（『鶴亀』の一節です）などと鼻唄まじりにやっていました。舞う事・謡う事がただただ愉しく、稽古に浸りきって思春期も過ぎました。

私にとっては稽古事でしかなかった能が、やっと「見る」対象と成り変ったのは、京都へ移転してからです。当初は、その観能も、稽古事の延長線上に在りましたが、やがて、観能三昧の生活に陥ちてしまいました。

ですが、これも、ただ能にぞっこんで没りきっているだけで、能に就いて何かを考えるとといった事はしません。惚れた男の分析なんか、私に

出来ようはずがありません。

ところが、大学院時代に、世阿弥にめぐり逢ってしまったのです。そして、能は、研究の対象とも成りました。

能の研究は、当時既に細分化されており、二ツ目の修士論文（専攻転換に伴って他の大学院へ入学し直したので）が江戸期の謡の版本に関する文献書誌学的研究であった私は、「重箱の隅」を突突いているばかりで、能という大山の登山口でもたもたしていました。

観世鏡之亟にめぐり逢えなかったら、私は、研究は勿論のこと、能そのものを放擲していたかもしれません。

『源氏物語』夕顔の巻を典拠とする能は二曲在ります。『夕顔』と『半蔀』です。『夕顔』は、自ら（夕顔）の頓死に依って光源氏との契り

が余りにも儚く終ってしまった、その悔いがテーマ。『半蔀』は、悔いよりも、光源氏と契る事が出来た歎びの方をテーマとしているので、悲劇性は薄い。しかも、シテ（一曲の主役）が、夕顔という花なのか夕顔という女なのかが不分明な仕立て。私好みのどろどろした女の情念を、これでもかこれでもかと描写するドラマチックな曲ではありません。私にとって、『半蔀』は特に魅力的とは言えない曲。

ところが、あの日、鏡之亟の『半蔀』終演後、私は金縛りにあったような状態で、しばらくは席を立つ事が出来ませんでした。

誰の為にと言って咲くのではなく、また誰も見てくれなくても、ただ咲き笑む花の生。今生最期の恋に、純粹に生きた女の生。そして、鏡之亟の生。『半蔀』ぐらいなら私は謡も舞も熟知しています。でも、そのような（知）を超えたところに私を連れていったのが、あの日の鏡之亟の『半蔀』でした。

能というものを初めて見たような気がしました。そして、演劇としての能とのつきあいが、やっと始まりました。二十年前の話です。